教育広報

かけはし

第28号　平成９年２月28日発行
発行　千代田区教育委員会

ウエストミンスター・シティスクールにて

イギリスの学校の授業に参加させていただきました。

片言の英語が通じたので、とてもうれしくなりました。また、授業の内容も理解できました。

主な記事

☆ウエストミンスターの思い出
—区立中学校生徒海外交流教育—
☆子育てサロン「いずみ」（和泉幼稚園）
☆学校行事ア・ラ・カルト
☆富士見小学校・幼稚園の
校歌・校章、園歌・園章が決まる

＊教育広報「かけはし」は資源保護のため再生紙を使用しています。

ウエストミンスターの思い出

千代田区立中学校生徒海外交流教育として、昨秋十月二十二日から二週間にわたり、中学生十名がイギリスのウエストミンスター市へ派遣されました。

言葉や生活習慣、食事等に戸惑いながらも十日間のホームステイを通じて、イギリスの家庭生活の一端を体験することができました。温かく、細やかなホストファミリーの心遣いにより、毎日楽しく生活ができ、心の交流も一層深まったようです。

また、各所の見学を通して、ヨーロッパ文化の奥深さを改めて認識してきました。

なお、ここに紹介するのは、帰国途中の機内で各自が書いた感想文から抜粋したものです。

心配なかった言葉の壁

麹町中　一年　鏑木　信行

「言葉の壁」が行く前から最も心配していたことだったが、やはり言葉は手段でしかないということをこの二週間で学んだ。顔も知らなかったパートナーに突然会って、その日からホームステイという大変な日程だったが、あっという間に仲間になってしまい、ペンの家が自分の家のような錯覚さえ起こしてしまった。そんなふうに思えたのは、きっとペンも僕のことを理解しようと努力してくれたことと、僕もペンやその家族などを知るために努力したからだと思う。お互い相手の言っていることを聞こうと思えば、たとえ生まれた国が違っていても通じ合えるということに自信が持てた気がする。

自分のパートナーと友達になって楽しい十日間を過ごせたことが何より良かったことだが、その他のパートナーの人たちと友達になれたことも良かった。お互い真剣に相手のいうことを聞き、時にはふざけてジョークを言い合い、まさに理想の友達をつくれたような気がする。

温かいイギリスの家庭

麹町中　一年　谷口　奈々

言葉が通じないということは本当につらいことだ。けれど分からないことで逆に一生懸命に考えようとする。ホストファミリーも私が知っている範囲でなんとか理解させようとしてくれる。その他、身振り、手振りで大体のことは理解できるようになった。ホストファミリーは私を温かく迎えてくれ、イギリスを満喫させてくれた。そして特別ではない日常の生活を多く過ごさせてくれた。それが私にイギリスを一番身近に感じさせる思い出となった。私のホームステイ先は、とにかく家族で過ごす時間が多かった。音楽をみんなで演奏したり、家族が一つのことをしているところがすきに思えた。私はイギリスにきて、どうして日本人は毎日時間に追われ、忙しく過ごしているのだろうと思った。イギリスの生徒は、塾などに行っていない。自分と家族の時間を持ち、それでいて学校のこともきちんとしているのだ。

▲国会議事堂の見学

楽しかったイギリスの家庭生活

九段中　二年　今井　悠人

僕にとってこの海外派遣はとても貴重な二週間であった。ホストファミリーとの生活では、外国の生活習慣によって毎日を過ごすということが珍しく、おもしろく、楽しい出来事の連続であった。

パキスタン系イギリス人の家庭だったので、一番困ったのは食事だったが、それ以外は特に困ったことはなかった。心配していた英会話が思っていたよりも通じたのは一つの驚きであった。家族はみんなやさしい人たちで、「洗濯機を借りたいのですが。」というと「OK」といって洗濯をしてくれた。パートナーのイムランは明るく冗談ばかりいって楽しませてくれた。僕がリラックスできるように気をつかってくれたのだと思う。

ウエストミンスター・シティスクールは、日本の中学と違って十二歳から十六歳で、年齢に関係なく能力によってクラスが編制されていた。ちょうど日本の塾のようである。また学校にはいろいろな人種の人がいて、一緒に勉強をしていたのが新鮮な驚きであった。

言葉が通じたうれしさ

九段中　一年　萩原　美希

イギリスに行くにあたって、私が一番心配していたことは言葉の問題であった。しかし、実際に現地の生活で特別言葉に困ったことはなかった。少しの単語や、ボディー・ランゲージですべてが通じてしまうからだ。ボディー・ランゲージで会話をしていると、言葉は違ってもやはり同じ人間なんだなあとつくづく思った。家族の方も気をつかって、ゆっくり話してくれたり、紙に書いてくれたりしてくだ

▲パートナー達と一緒に記念撮影（タワーブリッジにて）

さった。会話ができたときは、言葉にならないほどうれしかった。

学校でもイギリスの友達が日本のことに興味を持ってくれたり、授業の内容を教えてくれたり、いろいろと仲良くしてくれた。

家庭生活や学校生活、食生活など、日本と違い大変な面もあったが、頑張ればなんでもできるということが分かった。

「何にでもチャレンジし、有意義な日々を送る」と言う目標は達成できたと思う。

五つの学習課題

一橋中　一年　伊東　玲

課題の一つ目は、ロンドン市内見学とテムズ川クルーズで、ロンドン塔を見学できてとてもうれしかった。テムズ川ではテムズバリアのしくみが印象に残った。

二つ目は、オックスフォード見学で有名な大学の教授席でランチが食べられたことで、うれしさとともに誇りさえ感じられた。

大英博物館はとても大きく、また大きな図書館もついている。あまりの大きさにすべてを見られなかったのが残念だった。

四つ目はイタリアのポンペイ見学である。ポンペイについては日本で一番身を入れて勉強し、夏休みには何回も図書館に行き資料を集めた。本で見たのと実際とはやはり少し違うように感じた。

最後はバチカン美術館である。システィーナ礼拝堂の「天地創造」「最後の審判」はとてもすばらしかったが、フラッシュがたけず写真に撮れないのが残念だった。中学生としてはなかなか経験できないことを実現できたことは、とてもすばらしいことだと思った。

家族の一員になれたホームステイ

一橋中　一年　高岡　翼

パートナーのナナと妹のミミと父親は、簡単な英語でゆっくりと話してくれた。母親はとても早口なので、わかる英語もなかなか聞き分けることができなかった。弟のオウバートは、表情で一生懸命伝えようとしているのが良くわかった。家族のみんなは、ほとんど言葉の通じない初対面の私を本当の家族のように受け入れてくれた。最初のうちは少し他人行儀だったが、しばらくすると私とナナは本当の兄弟より仲良くなっていた。私がお世話になった家は、家族全員がそろうことは少なかったが、みんな仲良しだった。弟が子供らしくわがままで泣きわめいても、母親は母親らしく何事もなかったようになぐさめている。こんな家庭の内側まで見ることができたが、こんな光景を見るにつけ、家庭の中は世界共通だなと思った。この家の食事はとてもおいしかった。

悲しかったチケとの別れ

今川中　一年　栗田　和憲

僕はホームステイをする前はいろいろ心配ばかりしていた。ところが実際はそんな心配は必要なかった。僕とチケは毎日のようにペンと鏑木君と一緒に行動していたため、すぐに仲良くなった。仲良くなり過ぎて喧嘩になりそうになったこともあった。僕はホームステイが終わり、お別れのときにチケやチケのお母さんが泣いて抱きしめてくれたときに、初めてチケの家族が僕のことを家族の一員として認めていてくれたのだということがわかった。僕はとても悲しくなったが、でも悲しいのを我慢して泣かなかった。この派遣の期間の中で僕が後悔したことは、この時に泣かなかったこと一つだけだった。

チケの家族はみんなやさしく僕に聞いてくれたり、教えてくれたりしてくれた。チケはいつもユニークで歌を歌ったりダンスをしたり、僕たちにいたずらをしたりで、僕のパートナーになったのが不思議なくらい性格も行動も似ているような気がした。こんな仲良しのチケと別れるのは本当に悲しかった。

心が通じ合ったホストファミリー

今川中　一年　渡辺　菜月

私は別れのときは笑顔でいようと決めていたのに、大泣きをしてしまった。そうしたらデニーズが抱きしめて、一緒になって泣いてくれた。そのとき私は「自分は本当に幸せだ」と思った。何よりうれしかったのは、家族が私にいってくれた一言一言すべてです。「二～三年すれば私たちは大きい家に引っ越します。そう

したらあなたはもっと英語を勉強して、いっぱい話せるようになって戻ってきてください。」とか「また来年五月には会えるのよ。すぐに手紙を書いてね。」などたくさんの温かい言葉をかけてくれた。一人ずつ抱き合い、握手したあと別れた。

出会いには必ず別れがあるのはわかっているけれど、この悲しさは想像以上のものだった。こんなに早い別れなら出会いなんてなければいいと思った。でも、今は来年五月、デニーズに会うことと、いつかまた家族と再会できる日を楽しみにしている。

海外派遣を通して学んだこと

練成中　二年　大出　武

この海外派遣という貴重な体験を通して、僕はたくさんのことを学んだ気がする。まず第一に、ホームステイを通して自分に自信が持てるようになったことである。

第二に、勇気を持ってチャレンジできるようになったことである。ホームステイではあいまいなイエスやノーは禁物で、良くわからなかったら何度でも聞き返す勇気を持った。それに店などで値段がわからない品物があったとき、いくらですかと聞けるようになった。

第三に、イギリスやイタリアの歴史を理解することができた。ロンドン塔やポンペイなど歴史のあるものを見たり聞いたりしたことでよく理解できた。

第四に、きれいなものをきれいと感じられる心を持った。日本では美術館に行くことなどとんどなく、あまり興味がなかった絵画や彫刻などは、大英博物館やバチカン美術館を巡るうちにだんだん興味がわいてきた。

この二週間の海外派遣は、多くのことが学べた貴重な体験であったと思う。

イギリスの家庭生活を体験して

練成中　二年　林　真実

外国でのホームステイなどもちろん初めてだったので、言葉や生活習慣の違いがとても不安だった。けれどアンナもアンナの家族も、とても温かく家族の一員として受け入れてくれた。そして、本当に何も知らない私に、丁寧に一つ一つ教えてくれ、私が生活しやすいようにといつも考え、いろいろと気を使ってくれた。そのお陰で習慣の違いにはすぐに慣れることができた。また、言葉の方も初めのうちは一生懸命話しかけてもらっても答えることができなかったり、話したいことはたくさんあるのにうまく通じなかったりして、つらいこともあった。でも、それも何日か生活しているうちになんとか答えられるようになったし、会話もちゃんとした言葉ではなかったと思うが通じるようになった。アンナもファミリーもみんなが私の話すことを一生懸命聞いてくれた。私が十日間も一人でホームステイできたのも、周りの人たちのお陰だと思うし、自分一人だけということがだれにも甘えられない気持ちにさせ、一生懸命にさせたのだと思っている。

千代田区の指定文化財 ―その四―

○指定番号　千有民第二号
○種　　別　千代田区有形民俗文化財
○名　　称　山車人形「熊坂」
○所 有 者　小栗　弘二　氏
○所 在 地　千代田区神田須田町一―十二
○指 定 日　昭和六十三年四月一日

この山車人形は、神田須田町にお住まいの小栗弘二氏の所有で、高さ一五六cmとほぼ大人と同じ大きさです。明和年間（一七六四～一七七二）の作と伝えられています。

「熊坂」は、熊坂長範という平安末期の大盗賊で、伝説上の人物です。人形の頭には目玉が回転するようなからくりが施されています。また、胡粉の塗り方や眉の植毛の仕方などに、当時の技法を知ることができます。

この人形は、神田明神（現在の神田神社）の祭礼には、他の山車とともに欠かせないものでした。

江戸には、山王権現祭礼（日枝神社）、神田明神祭礼（神田神社）、赤坂氷川神社祭礼、佃島の住吉神社祭礼、浅草の三社権現祭礼（浅草神社）という現在に伝えられている祭礼があります。このうち山王権現と神田明神の祭礼は、天下祭と称され、将軍が上覧（見物）し、参加するものでした。

この大祭は、両社とも別々に行われていましたが、氏子の祭礼に関する費用負担を軽くするため、天和二年（一六八二）からは、両社の祭を隔年に行うようになり、現在に至っています。また、江戸時代には現在の祭礼に伝えられている神輿とともに、山車が町々を練り歩きました。

山車は各町の象徴であり、氏子たちが町名や町の成立にちなんだ人形を乗せたものを作り、管理していました。

指定された山車人形「熊坂」は、神田明神の氏子である連雀町（現在の神田須田町一丁目と神田淡路町二丁目の一部）で作られた山車の上に乗せられたものです。

現在では、江戸で作られた山車は、青梅市や栃木市などに流出してしまい、現存しているものは少なくなっています。

こうしたなかで、この山車人形「熊坂」は、江戸っ子の心意気を支えた祭礼の一部を示す、永く後世に残していきたい貴重な資料です。

子育てサロン「いずみ」

和泉幼稚園で子育てサロン「いずみ」というユニークな活動を行っています。

これは、主として未就園児とその保護者の方を対象に、幼稚園を子育ての広場として開放し、育児の不安や悩みを少しでも解消していこうとする試みです。

今回は同幼稚園の佐瀬スミ子園長に説明していただきました。

「先生、うちの子、まだ、おむつが取れないんですが…」「まだ、ことばがはっきりしなくて…」「私の言うことをきいてくれないんです…」等々、乳幼児を持つ保護者の方は、不安や焦りを覚えたり、子供との接し方に戸惑ったりすることが多いようです。昔から「子持ち夜半分」と言われているように子育ては大変な仕事です。幼稚園では、その子育てを支援し、育児体験を交流し合い、子育てに対する不安を少しでも解消していただき、自信を持って子育てを楽しんでほしいと願っています。そこで本園では、長時間保育室や園庭を活用し、土曜日の午前中、生後四ケ月～三歳までの親子の新しい出会いの場を提供しています。

一回を重ねるごとに、親子ともども「今日は！」の声も大きくなって、この場でお友達になった親子が毎回、来園するのを楽しみにしています。自由に玩具で遊んだり、時には親子で簡単な七夕の笹飾りや手作り楽器・お面を作ったり、体操をしたり、紙芝居を観たりして楽しく遊びます。また、保護者の方同士で様々な情報交換をしたり、先生と子育ての話しをしたりしています。"子育てサロンでお友達ができました"「ここに入園するのが楽しみです」「もっと回数を増やしてほしい」等々の嬉しい感想も聞かれました。

本園の子育てサロン「いずみ」は、和泉幼稚園の「和泉」と「泉」の如く勇き出る保護者の方のパワーから名付けました。皆のパワーが子育てパワーにつながり、子育ての〝わ（輪・和）〟として広がることが願いです。〝皆で育て・皆で考え・皆で解決する〟を理想に、今後一層、地域に開かれた幼稚園を目指していきたいと考えています。

▲子育ての悩みを語り合う

学校行事 ア・ラ・カルト

・中学校連合文化祭
・ふれあい給食（麹町小）
・ふれあい広場（和泉小・幼）

▲お世話になっている方々と一緒に（麹町小）

▲神田ばやしを教わりました（和泉小・幼）

▲さわやかな歌声が響く（中学校連合文化祭）

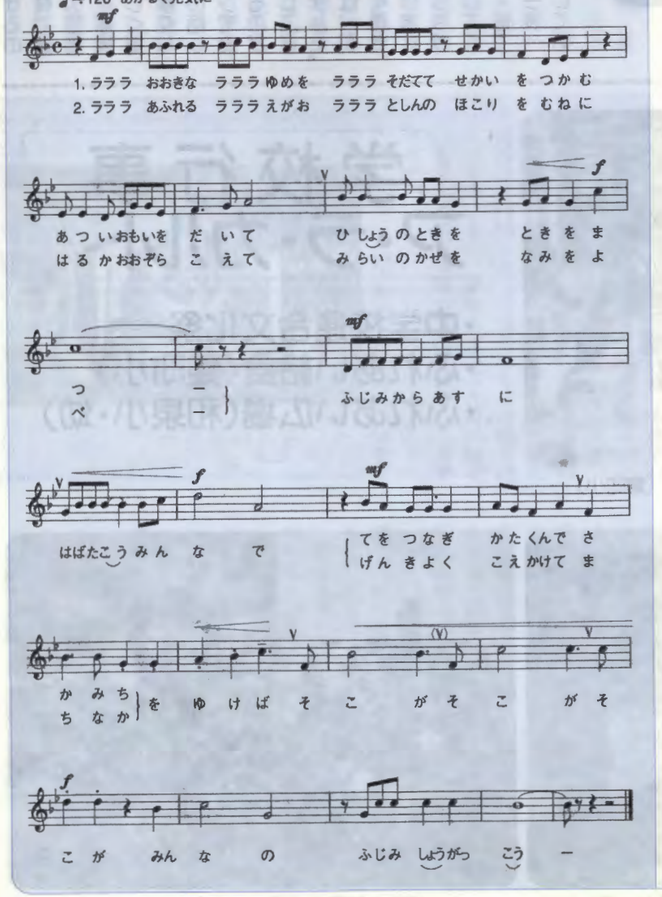
富士見小学校・幼稚園の校歌・校章、園歌・園章が決まる

富士見小学校・幼稚園の校歌・校章、園歌・園章が決まり、このほど発表会が開かれました。

みんなに親しまれるようになってほしいものです。

富士見小学校　校歌

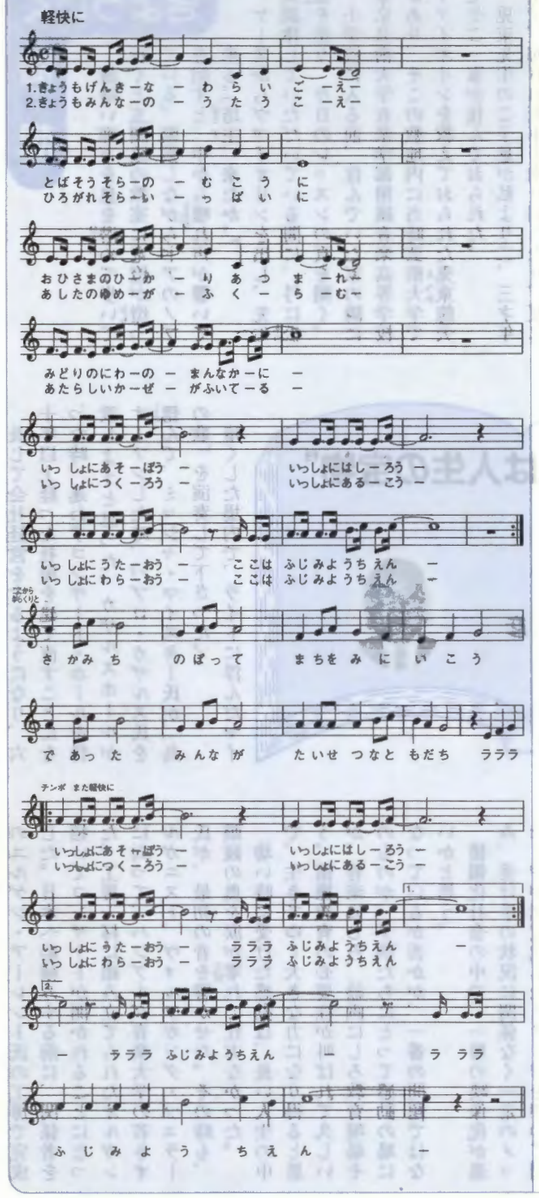
作詞　東　龍男　　作曲　平吉　毅州



一、ラ・ラ・ラ　あふれる
大きな夢を　笑顔を
ラ・ラ・ラ　育てて
ラ・ラ・ラ　都心の
世界をつかむ　誇りをむねに
熱い思いをだいて　はるか大空こえて
飛翔の時を時をまつ　未来の風を波をよべ
富士見から明日に　富士見から明日に
はばたこうみんなで　はばたこうみんなで
手をつなぎ　肩くんで　元気よく　声かけて
そこが　みんなの　坂道をゆけば　街なかをゆけば
富士見小学校　そこが　みんなの
富士見小学校　富士見小学校

富士見幼稚園　園歌

作詞・作曲　新沢としひこ



1. 今日も　元気な　笑い声
とばそう　空の　向こうに
おひさまの　光　あつまれ
みどりの　にわの　まんなかに

いっしょに　あそぼう　いっしょに　走ろう
いっしょに　歌おう　ここは　富士見幼稚園

2. 今日も　みんなの　歌う声
広がれ　空　いっぱいに
明日の　夢が　ふくらむ
新しい　風が　吹いてる

いっしょに　作ろう　いっしょに　歩こう
いっしょに　笑おう　ここは　富士見幼稚園

坂道　のぼって　町を見に行こう
出会った　みんなが　大切な友だち

ラララ　いっしょに　あそぼう　いっしょに　走ろう
いっしょに　歌おう　ラララ　富士見幼稚園

いっしょに　作ろう　いっしょに　歩こう
いっしょに　笑おう　ラララ　富士見幼稚園

ラララ　富士見幼稚園　ラララ　富士見幼稚園

校章・園章

制作者　平松　暁氏

「富士山」と千代田区の区花である「桜」をモチーフに、無限の可能性を一本のラインに表現しています。グリーンの力強いラインは、富士見小学校の子供たちのたくましい心身の成長、そして全体の輪郭は、富士見の「み」と同時に、国際社会における人間の信頼、愛情の「むすび」を象徴しています。

小さな小さなエネルギーと優しい成長への願いを、ピンクの色彩に宿し、軽やかに波動する二本のラインは幼稚園児の成長の過程を意味しています。

FUJIMI

▲小学校

FUJIMI

▲幼稚園

きょういく 随想

“感動！それは人生の宝物”

石川晴彦

薄暗い廊下を息を潜めて歩いて行くと玄関脇の教室に電燈が燈っている。緊張しながらドアのノブを回すと、中から嗄れ声が響いて来る。「坊主、来たか。」

ケースからヴァイオリンを出し、先生に調律していただいている間に、弓に松脂を塗り、今日のレッスンの頁を開く。

小学校に入る前、住んでいた家の隣に東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校があり、そこの敷地内に当時芸術大学でヴァイオリンを教えておられた兎束龍夫先生ご一家が住んでおられた。

兎束先生のご子息が私より二、三才年上で、毎日自転車を乗り回したり、夏には蝉採りをしたりと、良き遊び友達だった関係から、いつしか私も先生のレッスンを受けるようになった。レッスンはいつも遊び疲れた後、先生にとっては授業が終った後の夜だった。

幼稚園児だった私に対しても、先生の指導は厳しかった。同じフレーズを何度も何度も繰り返し弾かされた記憶がある。才能の方は、所詮、限界があり先生の期待に沿えない結果となったが、低音を弓一杯弾いた時に、体に響いて来た音。なかなか届かない小指で必死にE線の弦を押さえた時に響いた自分のものとは思われない音。それらを自分の体のどこかに、宝物のようにそっと、仕舞い込んで来たように思う。

長じて会社経営をするようになり、六十年以上経った社屋を建て直すことになった時、迷わずコンサート・ホールを併設しようと思った。カザルスホールがオープンした時、パブロ・カザルス氏を偲んで、ミッシャ・マイスキー氏が「鳥の歌」を演奏して下さった。

暗くした場内で、ライトに浮んだマイスキー氏が静かに演奏を始めたその時、遠い音、音楽学校の薄暗い教室で仕舞い込んだ音が、体の中で響いたように感じた。訳もなく、涙が零れた。音楽を聴いて体が震えるという経験を初めてした。

昨年十二月、カザルスホール十周年の為に以前より製作を依頼していたパイプオルガンが、北ドイツの小さな町、レアのユルゲン・アーレント氏の工房で完成した。日本へ船積みする前に、関係者を招いてコンサートが開かれることになった。工房一杯に組み立てられたオルガンに向って、ハンブルグ音楽大学の若きオルガニスト、ヴォルフガング・ツェラー氏が、最初の音を響かせた。その時も、眼鏡の奥を涙が零れて仕方なかった。

幼い時に受けた感動は、長い人生の中で、生きてゆく大きな力になり得ると思う。情操教育の必要性が叫ばれて久しいが、音楽にしろ、絵画にしろ教育現場そのものが、子供たちにとって感動の場になっているか否かが、一番の問題ではないかと思う。

情報化社会の中で、一層の映像化が進み、受け手の状況に関係なく一定のメッセージが固定化したイメージを伴って間断なく飛び込んで来る。

このような環境の中だからこそ、常に何が本物なのかということを求め続け、本物が与えてくれる感動のすばらしさを身をもって体験していくことが、何よりも必要なことではないだろうか。

子供たちのみずみずしい感性は、それを待っているのだと思う。

いしかわ　はるひこ
千代田区教育委員
会社社長

きょういく 随想

編集後記

日本海でロシアのタンカーが沈没し、大量の重油が流失した事故で、沿岸各地が深刻な被害を被っています。

一方、厳しい寒さの中、多くのボランティアの方々が全国から集まり重油の除去作業に参加されているとのことで、この心温まるニュースには拍手を送りたいと思います。

さて、本号ではウエストミンスターに派遣された中学生の感想文を掲載しましたが、帰国途中の飛行機の中で書いた感想文ですので記憶も新しく、生き生きと率直に書かれていて心を打つものがあります。このような感動や感激が将来の国際理解や国際親善に必ずつながるものと思います。

二学期も残り少なくなってきました。子供たちはこの一年間を振り返り自分をどのように評価したことでしょう。新しい年度に向け、自分なりの目当てをしっかり立てさせたいものです。

「かけはし」についてのご意見・ご感想・ご要望をお待ちしています。

教育広報「かけはし」第二十八号
平成9年2月28日発行
編集発行／千代田区教育委員会
〒102　千代田区九段南1-6-11
☎(3264)0151 内3114